



## 草田男晩年の珠玉

### 沢木欣一

晩年というのはいったい作家にとって何であるのか、ここでは細かい穿鑿はさておいて、常識的に年老いた時期、また死に近い時期をさすことにしておく。文学に限らず作家は死期近く最後の光芒を放つ人あり、またそうでない人もあり千差万別であるが、そのことは作家の全体的な価値とは関係のないことである。

中村草田男は昭和五十八年八月五日、八十二歳で生涯を閉じた。身体の上での疾患をあまり聞いていなかったのも、もっともと長生きされるものと期待していたのであるから、急変とも思われる死には茫然自失した。草田男さんにしては早過ぎる、残念至極だとショックを受けたのであるが、今にして考えると天寿を全うされたのではないかという思いが強い。しかしながら晩年という言葉は草田男に最もふさわしくない。万年青年であった草田男に晩年は無かったのではないかというのが私の単純な結論である。年齢にかかわらず草田男の死は天折というにふさわしい。草田男にあっては文学上の老いは無かった、少なくとも富安風生や大野林火に見

られる「老いの花」という要素は見られない。私は草田男の晩年を低く見ているわけでは決してない。天折という言葉は適切ではないかも知れないが、作品の評価とは別に草田男の長い道程における志の高さと壮絶さを強調したいのである。

草田男の句集は『長子』（昭和十一年刊）より『時機』（昭和五十五年刊）まで八冊刊行されている。『時機』には三十四年から三十七年までの作品と四十七年のデューラーの「メランコリア」の作が収められており、三十八年以後の作品の句集刊行は準備中であつたが実現されなかった。没後、翌五十九年『中村草田男全集』（みすず書房）の刊行が始まり、第一回配本に「作品Ⅱ」が出された。これによって三十八年以降、没年にいたるまでの二十年間の作品を通読することができるよう。作品数は約五千句、これを草田男晩年の作とよぶのは粗雑に過ぎ、ためらわれるのであるが、慎重に読めば約五十五年間にわたる全句集の後期の一般が把握されるはずである。しかも、この五千句は門下であつた「萬緑」の人々も外部の愛読者も未だ充分な詮索を行っていないといつてよい。私

なども「萬緑」誌で毎月発表されている作品は注目して読んでいたのであるが、何分長期間なので、印象が散漫となり焦点が合わないままに過ぎてきた。今度この五千句を通読する機会を得たことは幸いであつたが、一句一句さまざまな想念を交えながら作品評価を加えて読み進むのは大変な苦痛であつた。

本当は草田男の前期・中期の作品と比較し、分析・総合の作業を進めるべきであろうが、今はとてもその余裕がない。ここには五千句のなかからほしいままに珠玉を拾うことにしたい。

#### 舌鼓 めく 春耕の土切る音 (昭38)

早春の土に鋏を入れて裏返しているのだが、鋭利な鋏の歯が土を切る音をとらえ、「舌鼓めく」と比喩で表現したところが草田男らしい。間髪を入れない比喩が鮮やかで快い。草田男の比喩は時に観念に流れることがあるが、この句は実像が生きているので力強い。すぐれた写生句である。

#### 赤鉛筆 六本 買ひぬ 朱夏 小田 (昭38)

比較的長い前書きがあり、小さな文具店に「ものしづかなる母姉の姿あるを認めて、むなしく通過することをなし得ざりき」とある。草田男は晩年「軽み」という言葉を嫌ったようだが、この作などまさしく草田男流の軽みの句である。「赤鉛筆六本」は実際に買ったのであろうが、実を超えて動かない確かさに昇華している。素材は日常の些事であるが、

草田男の実直でやさしくつつましい心情がうかがわれ、彼のすぐれた童話に通じる好ましさがある。

#### もろこしを噛んで含ます代りありたり (昭39)

もろこしは唐もろこしであろう。実の一粒ずつを母親が噛みくだいて赤子に口移ししているところ。自分が唐もろこしを喰べながらの即物的発想であるが、「代りありたり」と断定するところに母性喪失の世相への批判が覗いている。こういう句は草田男でなければ出来ない。

#### 梅雨 近み 急ぐかに 急かぬ 木魚の音 (昭39)

長い前書きがあり、面白いので写す。「数年前、栗林一石路氏葬儀の場にて、隣席なる中野重治氏に、なにげなき調子の低声にて、『木魚の音といふものは、よいものですね』と言はれしことが、何故にか想起されて。一句。」

草田男の前書きは独特なものがあつて、人柄を彷彿とさせるが、時には煩瑣で読みづらいものも多い。この場合は絶品というべき味があり、中野重治の人間像が確かにとらえられ、その言葉を記憶した草田男の柔軟な感性もすばらしい。余談であるが、一石路自宅で営まれを葬儀には私も参列し、当時の雰囲気を感じ出すことができた。この句では木魚の断続する単純な音を「急ぐかに急かぬ」ととらえた感じ方が即物的で、しかも広がりがある。大げさにいえば己が生き方・人生観のバースペクトプが出てくる。私には草田男が中野重治に親近感を持っているのが珍しい。性情も作品傾向も全然別物であるが、生真面目という点では共通性があるうか。

さかさに吊らば鼻血出る身ぞ大緑蔭 (昭39)

草田男の面目が躍如と表れている作。意気盛んなるものがあり、老の影など何処にもしのびよっていない。「鼻血出る身」というのが、生理のなまなましさを伝え、人間生ま身の不可思議さを実感させる。戦前の作、「肉屋の鉤に彼奴を吊り」の句を思い出す。

昭和三十九年は草田男六十三歳、豊饒多作の年で、全集巻末の香西照雄解説によれば一年間の総句数八十一句、昭和四年以来五十四年間の句作において最高の句数という。後期の大きなピークともいえるべく、佳作も多い。

男性か否か赤裸の夫を凝視せよ (昭39)

泉辺に足洗ひあひ修道尼 (〃)

向日葵の蕊單純に余熱あり (〃)

太腿らしくなりつつ末子運動会 (〃)

呑み余る母乳に咽び金木犀 (〃)

紅葉焚きし灰やしばらく火を含む (〃)

「紅葉焚きし」の句は「俳句」(昭58・11月)誌で作間正雄も佳句として挙げている。同じ年の末に、

嚮後二十年命は露かダイヤなるか

の作がある。香西照雄は解説の終りに「昭和三十八年以降の約五千句を作った草田男の命はやはりダイヤモンドであったと思う」と書いているが、深く共鳴するところである。しかしこの句そのものは佳くない。草田男のナマの気持はよくわ

かるが、観念露出で作品としては残念ながら低い。

昭和四十年の作では、

爪木折る音もありつつ笹鳴ける (昭40)

日向に在れ櫓を探して来るまでは (〃)

冬帽とつて初産の報ことほぎぬ (〃)

こういう句は草田男らしくない、草田男を俟たなくても在り得るという人もあるに違いないが、私はやはり草田男でなければ出来ないやさしさ・なつかしさが籠っていると思う。

昭和五十四年三月、「萬緑」は三五〇号に達し、記念号を出した。草田男と平畑静塔の対談があり、後年の草田男の心情を理解するための貴重な資料となったが、そのなかで、草田男は神田秀夫の「懐かしくてどうにもしようがないような思出。そのすべてが恩なのだ。」という言葉を紹介共鳴しているが、恩というのは古くさい言葉で、日本人一般の古来の恩なのか、あるいはキリスト教の神の恩寵なのか区別すべきであろうが、懐かしさというには前者の方ではないかと考える。山川草木そして人間になつかしき、恩を感じるという心意・情感は東洋のものであり、俳諧の精神でもある。大げさなこちたき修辭を用いなくても草田男俳句には晩年、それが生きているのである。

昭和四十年には問題作がある。

漁色者は色氣に合へずおそ桜 (昭42)

これには傑作な前書きがある。「或る物故俳人の生涯の上に断ず。一句。こは、漫罵にあらずして、わがひたぶるの引

導なり。」ある物故俳人というのは誰であるのか興味の湧くところであるが、草田男は「妻よりほかに女知らず」であるにもかかわらず俺の方が結局女の色氣を知ることにおいては勝たと強がっているのがおかしい。本当の漁色者でなければ色氣はわからない。漁色ということは知的な働きであるから妻よりほか女云々であろうとなかろうと関係のないところである。それをこの句のようにわざわざ断定するところに草田男の純情といおうか、稚氣満々がある。楽しい俳諧味とい

へきか。

噴井戸の蓋を勝氣の女房掲ぐ (昭45)

この句は他人の妻を詠んだものかも知れないし、佳句ともいえないが、「勝氣の女房」という言葉に草田男の潜在意識がうかがわれるようだ。

花下のわが逍遙遊を子等嘉す (昭48)

こういう句は楽しい。心のおのずから開く明るさがある。

夢の中湯気の中よりふかし蓆 (昭50)

岩滑る冬水一重漆黒に (昭52)

亀の子や古水押さへ押さへ泳ぐ (〃)

黄菊白菊をもつばらにして菊枕 (昭55)

口一つで蟻の総身喰下がれる (〃)

上へと誘ふ川上の音初桜 (昭58)

「ふかし蓆」の作は暖かくなつかしい気分、この夢は草田男らしい非凡さがある。「冬水」「亀の子」の句は共に的確な把握衰えず新鮮そのものである。「蟻」の句はそのぎりぎり

の生命力を具象的にとらえ迫力がある。虚子に学んで人間くさい写生の深化といたい。こういう句になると小動物と人間の生き方が対応し、草田男の境涯そのものと重なっている。初桜の句は没年五月発表作であり、根源廻行の潜在意思すら感じさせ、めでたくも悲しいが、初々しい艶がある。

草田男浄土という言葉は古くきてふさわしくないであろうが、私は草田男の本領は、人工に損なわれない純粋な自然人を全うしたことにあると思う。私は故意に草田男とカソリックの関係について触れなかったわけではない。もちろんキリスト教への傾斜を示す作品は無類にあるが、総じて観念的で饒舌、佳作に乏しい。これは必ずしも私の偏狭な無理解とばかりとはいえないであろう。五千句のなかから珠玉を拾いながら実はキリスト教の影響などということはどうでもよいと考えられてきたのである。

神田秀夫の言「風」五月号・四十周年記念号に、「晩年に処するというのは、存外、難しいことですね。ショックだったのは、草田男先生が亡くなる一日前にカトリックの洗礼を受けられたと聴いた時です。往年のツァラトゥストラの愛誦者が、こうなるとは。(中略)草田男先生にしてからだとなると、もうへ俳人とその思想」などということは考えただって始まらない、と思ってしまう」は本質としては当たっていないように思う。

もともと草田男を思想家とか予言者のように見る方がおかしいのである。